

「いただきます」を 忘れずに

作家・エッセイスト

森 久美子

◆私、作る人？

わが家には、大学二年と中学三年の息子がいる。私が夕方家にいる日は、彼等の帰宅後の第一声が決まっている。

「腹減った。メシ、なに？」

「先に、「ただいま」って言うてよ！」

そう言い返すが、食欲旺盛な二人を見ているのは気持ちが悪い。

言われると、おもしろくないかもしれない。でも私は、「作る人」であることが今は楽しい。

男の子は無口であるという先入観を持っていたが、二人の息子は実によくしゃべり、またよく食べる。食事のときに一番よくしゃべるものだから、疲れているときは、相槌を打つのも億劫になる。ときには静かに一人でご飯を食べたいと思う日もある。しかし食事は、「コミュニケーションを深めるためのいい機会だと、子供たちに教えられているように思う。

昔、レトルトカレーのCMで、「僕、食べる人」、「私、作る人」というセリフが問題になったことがあった。食事を作るのは女性の役目だと決め付けているのは差別であるといった論調で、ジェンダーについて語る社会学者もいた。確かに、他人から、それが女の役目であると

子供たちがうつむきかげんで黙って箸を動かし、食べる量が少ないときは、先生に叱られたり、友人との関係がうまくいっていなかったりと、なにかしら悩みがあるようだ。膝に乗せて抱きしめることができる



森 久美子 (もり くみこ) さん

作家・FMアップル「北の食物研究所」パーソナリティ

札幌市生まれ

1995年 朝日新聞北海道支社主催「らいらっく文学賞」入賞（作品は、開拓時代の農村の少女を主人公にした小説「晴天色の着物」）以来、多くの連載を持つ。

2002年 第8回ホクレン夢大賞・農業応援部門優秀賞受賞

2004年 農業土木学会賞・著作賞受賞

現在の仕事と公職など

- ・FMアップル「北の食物研究所」パーソナリティ（社団法人 北海道土地改良設計技術協会提供。99年から毎週「食と健康」をテーマに対談。企画・構成も）
- ・北海道教育委員会「子供の食生活を考える研修会」の講演とシンポジウムコーディネーター（2000年より）
- ・札幌開発建設部「未来へ残そう緑の大地～時代を担う子供たちに残す豊かな農業農村を考える女性会議」委員長
- ・北海道土地改良事業団体連合会・21世紀土地改良区創造運動表彰選考委員
- ・NPO法人 北海道田園生態系保全機構理事
- ・北海道教育大学岩見沢分校 非常勤講師など

ような幼児のときと違って、もう息子たちに肌を通してぬくもりを伝えることはできない。料理をしながら、さりげなく学校の様子を聞き、スキんシップの替わりに、温かい料理を食べさせるのが、私の役目なのだろう。

仕事で帰宅が遅くなる日は、朝のうちに夕食を作つてかけていたが、この頃は子供たちが大きくなって、彼等自身で作れるようになり、楽になってきた。母親は、自分が外食する日でも、子供のご飯を作らなければならぬので、男性とは違う苦労や忙しさがあるものだ。内心面倒に思いながらも、ご飯だけはちゃんと作ってきたから、今のところ（？）どうにかまっすぐに育っているのではないかと思っている。

◆農業を考えるきっかけ

幼い頃の記憶に刻まれた二つの風景。

祖父が北大農学部勤務していたので、実家は北大の農場の西側にあつた。子どものころ、夏になるとぐんぐん大きくなるデントコーンの畑で、かくれんぼして遊び、コーンの葉が風にそよぐ音を聞いていると心地よかつた。

もうひとつは、秩父別の親戚の農家で過ごした夏休みの風景だ。親戚のお兄ちゃんたちと駆け回って遊んだあと、たらいの冷たい水の中に浮かんでいるトマトやスイカを食べた。汗ばんだ額に髪がへばりついて、も、畦にたたずみ風に吹かれていると爽やかだった。今も私は、畑と田んぼ、どちらを思い浮か

べても、とても心地よいと感じる。生産圃場を持つエネルギーを、子供心に感じていたのだらう。

自分にとって当たり前だった北海道の農村景観の価値を再認識したのは、結婚を期に九年度の東京暮らしを経験したからだと思う。秋になると実家から送られてくるジャガイモやタマネギ。友人にお裾分けすると、みんな必ず喜んでくれた。決まっていたセリフは「北海道のものはおいしい」「北海道」がひとつのブランドだと知つた。

「広大な大地」と「青い空」。美しく澄んだイメージが「北海道ブランド」を支えている。農作物の味の前に、「農地」と「空気が最大の付加価値になっている。もちろん「北海道ブランド」

が一人歩きしている訳ではなく、寒冷地ゆえの、農薬の使用量の少なさや、寒暖の差の大きさによる栄養価の高さがあり、農家の方々の努力があつたことだ。

北海道の人が「田舎くさい」とコンプレックスを持つような農地・農村に、府県の人は憧れを持っている。北海道を離れて生活したことで、その良さを新鮮な気持ちで評価できた。そして私は、北海道で、自分にとって心地よい風景の中で生活したいと渴望するようになり、札幌に帰ってきた。

◆お天道様が見ている

95年に、朝日新聞社主催「らいらつくく文学賞」に入賞した小説「晴天色の着物」は、厳しい気候の中でひたむきに生

きる開拓時代の農村の少女を主人公にして描いた。執筆にあたって、多くの資料を読むうちに、今の農地・農村が形成されるまでの経緯を少しずつ学んだように思う。

明治時代には原野だったこの地を開墾し、農家の方々の努力と土地改良やそれを支えてきた方々がいてこそ、豊かで美しい農地・農村が築き上げられた。歴史や先人達の苦勞を知ること、現代に生きる私たちが失っているものに気づく良い機会となつた。

作品を書いているときにオウム事件が起きて、連日その報道があつた。なぜ人を殺すような罪を犯してもその宗教を信仰したのか。「お天道様に見られても恥ずかしくないように生きる」という、一人一人の心



の中にあるはずの指針を失っているように思った。そして、学校に行けず読み書きもできないが、心にその指針を持つ少女を描いた。

デビュー作をきっかけとして、以来、食や農業についての思いを表現する機会に恵まれている私だが、自分の食生活には、特に問題意識を持っていなかった。契機は六年前に訪れた。

◆湯気の上がる台所の幸せ

たった一人の兄弟である弟が病気になり、私は夜遅くまで病院で付き添いをしていて、子供たちの食事の支度をおろそかにする日が続いた。買った惣菜や弁当を与えて、食卓に温かいものが上がらなくなってしまうていた。子どもたちが情緒不安定になるという形で、つけ

はすぐに回ってきた。

親が夕食時にいないから、台所に湯気が立つことも、食卓においしそうな匂いや団欒もない。笑顔も消える。子どもたちにそれを失わせて、初めて普段になげなく家族のために料理していたことに意味を見出せた。私は家族に愛情を込めて食事の支度をした。その材料には、食べる人を思つて作つてくれたのがわかる農作物を手に入れて、それを料理したいと思つた。

人は毎日必ず食べ物を口にしますが、自分で刃を入れたり、煮炊きしたりしなければ、動植物の生命をいただいて食べていると気づかない。「ただいます」を出発点に、家庭の食生活から、子供たちに生命の循環を感じてほしいと願っている。